

い がしら まさ ひこ  
井 頭 昌 彦

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 284 号
学位授与年月日	平成20年9月4日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	多元論的自然主義の可能性
論文審査委員	(主査) 教授 野家啓一 教授 座小田 豊 教授 森本浩一 准教授 荻原 理 准教授 直江清隆

## 論文内容の要旨

「自然主義」という立場は、一般的には、人間の認識や言語活動といった営みを自然の中で生ずるプロセスとして捉えようとする哲学的立場として理解されている。この立場はいまや現代哲学における論争の一つの焦点となっており、当時すでに広範な影響力を持っていたアメリカの哲学者クワインが論文「自然化された認識論」(1969)を公にして以来、認識論・心の哲学・科学哲学といった諸分野において様々な「自然化」の試みがなされてきた。この動きは生命科学や脳科学の分野における近年の加速度的な発達と連動して多くの支持者を生み出してきたが、他方でそれに反対する反自然主義者の側からも多くの批判と反論が展開された。この自然主義という哲学的立場の射程と妥当性を見定めることは、現代哲学における最も重要な課題の一つであると同時に、自然科学全盛の現代において我々の「自己理解」の深化に寄与するという社会的意義をも併せ持っている。

この自然主義論争はこれまでに多くの論文や著作、アンソロジーを生み出してきたが、論争が次第に拡大し混迷を極める中で、「そもそも自然主義とは何か」「自然化するとはどういうことか」という基本的な問いは置き去りにされてきた。そして、多くの著作や論文が生み出されたことによって明らかになったことであるが、現在では「自然主義」という立場の内容に関する共通理解は存在しておらず、このことが論争の生産性にとって大きな障害となってきているのである。

この点をもう少し具体的に見てみよう。戸田山和久によれば、自然主義を巡る現代の論争はおおむね二つのタイプに分類される。すなわち、

- (1) 自然主義そのものの妥当性を巡る自然主義者と反自然主義者の論争
- (2) 妥当な自然化の仕方を巡って展開される自然主義者同士の論争

の二つであるが、このどちらについても「自然主義」の内容に関する正確な共通理解の欠如は問題を引き起こす。まず、(1)のタイプの論争については説明するまでもないであろう。自然主義の妥当性を巡って論争しているのに、当の「自然主義」が何を意味しているかについての共通理解がなければ、支持者・反対者の間で議論の基本前提がかみ合わず論争はすれ違いに終わるほかない。他方で、自然主義理解の不一致が(2)のタイプの論争に引き起こす問題は〈自然主義の内容が明確に定まらないと、自然化の方針を模索する際に検討すべき範囲が定まらない〉というものである。たとえば、現在の自然主義研究者のほぼ全てが物理主義を前提として自説を展開しているが、このような状況はあまりに偏ったものである。というのも、自然主義はその導出経緯や論拠からいって物理主義や科学主義を含意するものと考えられるべきではないからである。物理主義は確かに自然主義の中で最も魅力的なプログラムの一つではあるが、あたかもそれしか選択肢がないかのような理解が広まることは、自然主義という哲学的立場の射程や可能性を考える上で大きなマイナスとなる。

こういった状況認識を踏まえて、本論では「自然主義という哲学的立場の内容の明確化」が第一の目的として設定された。これによって意図されているのは、自然主義に関する論争において生じてきたすれ違いを解消し、実り豊かな議論を可能にするための舞台を整備する、ということである。また、これに加えて本論では「物理主義的自然主義にかわりうる立場としての多元論的自然主義のモデルを具体的に構築しそれを擁護すること」が第二の目的として設定された。このことによって意図されているのは、〈物理主義や自然科学主義を含意するものとして「自然主義」を理解した上で、そういった偏狭な縛りをかけずに幅広い探究の可能性を認める「反自然主義」を対置させる〉という従来の自然主義論の構図を描き直すと共に、自然主義哲学の新たな地平を切り開き今後の議論のための土台をつくる、ということである。

「自然主義とはどのような立場か——クワインの自然主義規定とその導出経緯——」と題された第一章では、論文「自然化された認識論」(1969)から「自然主義；あるいは自分に与えられた手段の内生きること」(1995)へと至るクワインの一連の論文を主として参照しながら、現代的自然主義の内実を明らかにすることが目指された。本章においてまず指摘されたのは、クワインの初期の自然主義規定に含まれている不明瞭さであった。クワインは論文「経験主義の五つの里程碑」においてこの立場を「科学に先行する第一哲学という目的の放棄」あるいは「実在が同定され記述されるのは科学それ自体の内部においてであり、何らかの先行する哲学においてではない、ということの理解」として説明していた。しかし、何が「科学それ自体」の内に含まれるのか、「先行する第一哲学」とはどういったものなのかが明確でないため、この説明では自然主義という立場が何を含意し何を含意しないのかがはっきりしないのである。

こうした不明瞭さを解消するために従来の研究者たちが注目してきたのは「自然主義への移行を果たした後の哲学が行うべき作業として何をクワインが提示してきたか」ということである。そして、その結果として、ある者は「世界において生じている因果的プロセスの記述に終始する」という記述主義的な見解を含意するものとして自然主義を捉え、またある者は「物理学が述べる事実が世界において成立していることの全てである」とする物理主義や「自然科学のみが実在や真理に対する真正の探求である」とする自然科学主義を含意するものとして自然主義を捉える、というように、相異なる複数の自然

主義解釈が乱立するに至ったのである。本論の見解では、現代的自然主義の内容に関する統一的理解の不在は、自然主義研究においてこれまで採用されてきた指針にその原因（の少なくとも一つ）を持つのである。

このような分析を踏まえた上で、本論が自然主義の内実を確定するために着目したのは、むしろ「自然主義がどのような論拠に基づいて提出されたか」である。一般に、ある見解が説得的かつ理に適った仕方で主張されるためにはそれに対する「論拠」が必要となるが、それに加えて、その「論拠」には主張される見解を裏付けるだけの十分な内容が要求される。それゆえ、自然主義が依拠している論拠の系列を見定めることは、その内容を特定するための有力な手掛かりとなるのである。

論文「経験主義の五つの里程碑」においてクワインが「自然主義の二つの源泉」としてあげるのは「ホーリズム」と「頑固な実在論 (unregenerate realism)」の二つである。しかし、前者についてはその内容——経験的な検証の単位は「文」ではなく「適度に包括的な理論の全体」であるという考え——が明確であるのに対し、後者についてはその内容がはっきりしない、という問題が従来の研究でも指摘されてきた。そこで本論では、「信念体系外部からの正当化の不可能性」に基づいて主張される「体系内在主義」の表明として「頑固な実在論」を捉える解釈を提示した。この解釈を裏付けるものとしてまず挙げられたのは、自然主義が提出されるまでのクワインの諸著作においては、「自然科学の成功」を引き合いに出して自然科学をそれ以外の学問分野から区別するという議論や、「物理学の完備性」に言及して物理学にある種の特権性を認めるといった議論が一切提示されていない、という事実である。そして、「頑固な実在論」に関する本論の解釈を裏付けるための第二の論拠として挙げられたのは、論文「自然主義；あるいは自分に与えられた手段の中で生きること」の中でクワイン自身が〈自然主義と物理主義の分離可能性〉および〈人文科学や社会科学の事実性と自然主義との両立可能性〉を認めている、という事実である。こういった論拠に基づいて、本論では自然主義の導出経緯に対して次のような見取り図を提出するに至った。

体系内在主義（←信念体系外部からの正当化の不可能性）

+

経験主義的基礎づけ主義の不可能性（←ホーリズム）

↓

自然主義。第一哲学という目的が放棄され、科学そのものが実在の探求と見なされる。

そして、このように理解された自然主義は、もはや記述主義や自然科学主義、物理主義といった立場を含意するものとしてではなく、むしろそういった立場がそこから展開可能となるような「土台」として捉えられるべきものとなるのである。

以上の検討結果を踏まえて、また論文「自然主義；あるいは自分に与えられた手段の中で生きること」の中でのクワインの発言を参考にしながら、本論では自然主義を「仮説演繹法以上の正当化手続きの存在を否定し〈哲学が科学に先行しそれを基礎づける〉という第一哲学的構想を退ける立場」として規定し、これを「最小限の自然主義」と名付けることにした。さらに、この最小限の自然主義に物理主義や自然科学主義といった様々なオプションを付加することによって多様な自然主義的立場が構成される、という見取り図が本論における自然主義論の基本的構図として提示されたのである。

第二章では、第一章で得られた自然主義論の基本構図のもと、最小限の自然主義に付加されるべき存

在論的オプションを検討することを通して、より妥当な自然主義的立場を模索することが目指された。まず行われたのは、現代の分析哲学における存在論的探求の基礎を作ったクワインの論文「何があるのかについて」についての検討であり、それをもとにして、現代の存在論的議論において（「普遍的に採用されている」とまではいかないとしても）主流となっている存在論的議論の基本構図——「存在論的コミットメントの導出元となる文集合の特定」＋「存在論的コミットメントの基準の特定」＝「存在者のリストの作成」という構図——が提示された。

次に行われたのは、現代的自然主義において最も支配的かつもっとも有望と考えられている存在論的立場である「物理主義」を取り上げ、先述の存在論的議論の基本構図の内に位置づける、という作業である。その結果として本論が到達した見解は、物理主義のコアをなすスーパーヴィーニエンズ・テーゼは、存在論的議論においては、存在者のレベルに関する直接的な主張としてではなく、むしろその前段階である「存在論的コミットメントの導出元となる文集合の特定」というレベルにおいて機能する、というものである。この検討結果を受けて、「最小限の自然主義に付加されるべき存在論的オプションの検討」を目的とする本章の議論は、主としてこの後者のレベルにおいて展開されることとなった。

物理主義という立場の内容、および存在論的論争におけるその位置づけが確認された後、本論が向かったのは「物理主義が抱えている問題点を指摘する」という作業である。これまで多くの論者が物理主義の難点を指摘してきたが、本論で取り上げられたのは「物理主義の採用によって言語的意味ないし命題的態度に関する言明の事実性が否定されてしまう」というものである。本論では物理主義がこのような問題点を抱えていることを、クワインの翻訳の不確定性テーゼおよびデイヴィッドソンの解釈の不確定性テーゼの吟味を通して主張し、またこの両テーゼに関してこれまで提出されてきた先行研究とも照合してその説得性を補強した。また、その際、この不確定性テーゼ経由の批判が物理主義の基本構想のどの部分と直接的に対立しているのかを慎重に検討するとともに、まさにその対立点において、多くの自然主義者たちが受け入れている「物理主義の強固な説得性」が見た目ほど「強固」なものではない、という主張を展開した。

第二章の最後で行われたのは、物理主義的一元論にかわる代案を模索する、という作業である。不確定性テーゼ経由の批判が示唆していたのは、物理主義を採用すると「英語における“iron”は日本語における「鉄」と同義である」「彼は～のことを信じている」といった言明の事実性が否定され、結果として言語学、歴史学、倫理学といった諸学の主張から事実性が剥奪されかねなくなる、というものであった。このような問題を回避することと自然主義への移行を促すクワインの議論の説得性とを両立させるための一つの手段は「物理主義をとらない自然主義的立場を提出する」というものである。第二章第四節では、この方針を実現する一つの可能性として多元論的自然主義という立場を検討し、クワインの物理主義的一元論に対するパトナムの反論を参照しながら、この立場の内容を暫定的な仕方で特徴づける、という作業が行われた。

第三章では、それまでの議論によって一つの有望な選択肢として浮上してきた「多元論的自然主義」という立場をより明確な形に仕上げていくことが目指された。具体的には、多元論的側面を持つ哲学的立場を提出している先行研究を取りあげ、それらを参考にしながら、より妥当と思われる多元論モデルを提出する、という作業が行われたのである。また、この際には、提出される多元論モデルを極力具体的なものにするために、「多元化の単位（何の複数性が主張されるか）」および「多元性が主張される理由・論拠」を明確にすることにも重点が置かれた。このことによって意図されていたのは、物理主義的一元論に比して大幅に遅れてきた多元論に関する論点整理を進めると共に、本論で提出される多元論モ

デルを今後の批判的な検討に供しうるものにするものである。

第三章の前半部で取り上げられたのは、パトナムの概念的多元論のテーゼである。このテーゼは言語的図式の複数可能性を主張するとともに、その複数の図式を統合するための基礎的な図式の存在を否定するものであり、この点において多元論的立場を検討する際の格好の先行研究となっている。しかし、本論において詳細な検討がなされた結果、概念的多元論を提出する際の基本的なモチーフには問題がないものの、このテーゼに関して行われるパトナムの議論の細部にはいくつかの難点が存在する、ということが見いだされた。中でも特に問題だったのは、概念的多元論と概念的相対性のテーゼ（これは概念的多元論と密接な関連を持つものとしてパトナム本人によってたびたび言及されている）との関係に関するパトナムの見解に不整合が見られること、および、その不整合を処理しようとする概念的多元論において複数可能性が主張される「言語的図式」の同一性がはっきりしなくなってしまうこと、この二点である。

こういった問題点を解消しより説得的な多元論モデルを提出するための手掛かりとして本論が目にしたのは、80年代以降のパトナムの立場と多くの点で類縁性を示しているカルナップの見解である。しかし、カルナップの見解のうちどれほど多くの利点が含まれているとしても、そこから多元論の見解を抽出し、それを多元論的自然主義のモデルとして提出するためには多くの障害が存在する。まず、カルナップ哲学には確かに言語的図式の複数性を許容する側面があるものの、彼自身は明確に経験主義的・科学主義的な態度を打ち出しているため、この両側面の間に見られる緊張関係を解消する必要がある。さらに、「カルナップの諸見解はクワインによる分析性批判をはじめとする多くの批判によって過去の遺物として葬り去られた」とする評価が定着している現在においてカルナップ哲学に依拠した見解を提出するためには、致命的批判と見なされているものの回避可能性を示し、カルナップ哲学の市民権を回復しておく必要があるだろう。そして、第一章で見てきたようにクワインがカルナップの哲学的構想を克服することを通して自然主義への移行を提唱するに至ったのであれば「カルナップの見解を利用して多元論的自然主義のモデルを作る」という構想自体が不整合なものではないのかという疑問が生ずるのは当然のことであり、それゆえ本章の目的を達成するためにはこの疑念を処理する必要がある。

第三章の後半部では、こういった課題の一つ一つをとりあげ解消していくことによって、多元論的自然主義を具体化するための一つの有望なモデルとしてのカルナピアン・モデルを確立する、という作業が行われた。その結果として、本論が支持するカルナピアン・モデルの多元論について、(i) それはカルナップの哲学的立場そのものというよりはその一部から抽出されたものであること、(ii) クワインらによるカルナップ批判が回避されうるためにこのモデルの市民権はすでに確保されていること、(iii) カルナピアン・モデルの下で理解される多元論的立場を「最小限の自然主義に付加される存在論的オプション」と見なすことの内には何らの不整合も存在しないこと、がそれぞれ主張されるに至った。そして、その一方で、このモデルにおいては「多元化の単位」および「多元性が主張される理由・論拠」が明確であること、およびパトナムの見解に指摘されていた問題点が生じてこないことも示された。こういった考察を受けて、「カルナピアン・モデルを用いた多元論的自然主義」が本論において支持される自然主義的立場として提出されたのである。

物理主義が現代的自然主義において最も有力な存在論的立場であることは衆目の一致するところであるが、その一方で、クワインによって現代に復興された自然主義は物理主義を含意するものではないし、物理主義を前提にするものでもない。本論では、このことを自然主義の導出経緯から明らかにし（第一章）、さらに存在論的オプションとして物理主義を採用した場合に生じてくる問題点を指摘することで、

物理主義とは異なる方向で自然主義的立場を展開することの意義を確認した（第二章）。そして、多元論的立場の一つのモデルを具体的に提示することを通して、物理主義的自然主義に対する代替案としての多元論的自然主義という立場が実際に可能なものであることを示唆したのである（第三章）。

本論の自然主義規定は、現代的自然主義の導出経緯に着目する中で提示されたものであり、論理的かつ歴史的な説得性を有している。それゆえ、本論の議論によって、自然主義規定の曖昧さを主たる原因として生じてきた多くの「すれ違い」が解消され、実り豊かな議論が可能になることが期待できるであろう。また、本論第三章において提示されたカルナピアン・モデルは、自然主義を多元論的な仕方で開催する際の不可避な形態ではなく一つの「提案」に過ぎないものではあるが、少なくとも多元化の単位（＝意味論的体系）および多元化の要因（＝概念形成における目的の多様性）に関しては明確にされており、その点で今後の批判的議論を通して多元論的自然主義の立場をより精巧なものへと仕上げていくための材料・土台となりうるものである。したがって、「序」において設定された本論の二つの目的——「自然主義という思想的立場の内容の明確化」と「物理主義的自然主義にかわりうる立場としての多元論的自然主義のモデルを具体的に構築しそれを擁護すること」——およびその背後的な意図はおおむね果たされたと考えてよいだろう。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、クワインの「自然化された認識論」（1969）の問題提起以降、英米圏の有力な思想潮流となっている自然主義の内実を吟味し、それが物理主義的一元論へと収斂することなく、「多元論的自然主義」の立場が可能であることを論証したものである。

第1章「自然主義とはどのような立場か——クワインの自然主義規定とその導出経緯——」において、論者はまず自然主義の概念が多義的であることから、クワインの初期から晩年にいたる自然主義規定を詳細に検討し、そこから「体系内在主義」と「経験主義的基礎づけ主義の不可能性」というテーゼを取り出し、それに基づく自然主義解釈を「最小限の自然主義」と名づける。すなわち、「仮説演繹法以上の正当化手続きの存在を否定し＜哲学が科学に先行しそれを基礎づける＞という第一哲学的構想を退ける立場」がそれであり、この立場に様々なオプションが付け加わることによって多様な自然主義理解が成立するのである。

第2章「自然主義における存在論的オプションの選択——物理主義的一元論、および代案としての多元論」においては、現在もっとも有力かつ支配的な自然主義解釈である「物理主義的一元論」の立場が俎上に載せられ、それが内包する問題点が指摘される。論者はクワインの「翻訳の不確定性テーゼ」ならびにデイヴィドソンの「解釈の不確定性テーゼ」がもたらす帰結を仔細に吟味しながら、「物理主義の採用によって、言語的意味ないし命題的態度に関する事実性が否定されてしまう」ことを明らかにする。物理主義の立場は、見た目ほど堅固なものではないのである。

第3章「多元論的自然主義の構築に向けて」では、「物理主義」に代る「多元論」の立場から自然主義のモデルを構築することが目指される。その手掛りとして、論者はまずパトナムの概念的多元論を検討するが、そこでは言語的図式の複数可能性の主張が内的不整合を含むことが指摘される。それに対して、カルナップの意味論的体系の多元性の主張は、多元化の単位および多元化の要因について明確であることから、論者はカルナピアン・モデルを「多元論的自然主義」の有力な候補として提示し、それを基礎に自然主義のありうべき方向性を描き出すのである。最後に論者は、このモデルが「生命倫理」

「心の哲学」「現代知識論」などの領域で有効に機能しうることを示唆して論を閉じる。総じて本論文は、論争状況の的確な整理と明快で説得的な論述とによって自然主義の新たな可能性を切り拓こうとしたものであり、現代哲学の発展に寄与するところは大きい。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。